

複合動詞「～出す」・「～始める」の習得

—韓国語を母語とする学習者の意識を中心に—

白 以 然*

The Acquisition of Japanese Compound Verb ‘～hazimeru’ and ‘～dasu’ by Korean-speaking Learners

BAEK Yiyun

abstract

This paper is about Korean-speaking Japanese learners' conception of distinction between two suffixes for Japanese compound verbs: ~ *dasu* and ~ *hazimeru*. When ~ *dasu* means 'beginning,' it is parallel with the other suffix, ~ *hazimeru*. ~ *dasu*, however, has a different implication from ~ *hazimeru*, because it is derived from its original meaning, "move to out side." Previous researches have revealed that ~ *dasu* does not have intentionality or foreseeability. The present study tested whether the learners percept the difference between these two words through a test of 14 questions, and compared learner's meaning potential with Japanese native speakers'. The results said that learners understand the basic difference between the two words; in case of prototype of ~ *hazimeru* and ~ *dasu*, learners' choice was similar to Japanese NS's. However, the learners showed an opposite tendency to Japanese NS's in less prototypical sentences. This means that the learners have difficulty in choosing proper word in less prototypical sentences although they perceive the difference on the whole. Thus, it is inferred that they have different meaning potential from the native speakers'.

Key words : Japanese compound verb, the suffix '～dasu', '～hazimeru', meaning potential, prototype

1. はじめに

本研究は、開始の意味の複合動詞¹後項「～出す」と「～始める」の使い分けに関する日本語学習者の意識を見るものである。複合動詞は、上級以上の日本語学習者においても難しい項目と言われてきた(松田2004、森田1978)。複合動詞の結合方式および意味の派生が一律ではなく複雑であるのがその原因である。このような複合動詞は日本語と同じく「膠着語」として分類される韓国語にも存在する。韓国語でも2つの動詞を結合して1つの動詞として使うことができる。しかし、両語の複合動詞の種類および結合様式、意味派生などが一致しているわけではないので、韓国語を母語としている学習者も複合動詞の習得には困難を感じると予想される。

日本語の場合、動作の開始を表す後項動詞(以下V2)には「～出す」と「～始める」の両語が存在する。韓国語でも日本語の「始める」に当たる「시작하다(sijakhada)」に前項動詞(以下V1)をつけてその動作の開始を表せるが、「～出す」に相当する「～나이다(naida)」には開始の意味がない。李(1996)は、日本語の「～出す」

キーワード：複合動詞、「～出す」、「～始める」、意味領域、意味の典型性

*平成17年度生 国際日本学専攻

と韓国語の対応語「～나다 (naida)」の意味の対照研究を行い、日本語の「～出す」にはある開始の意味が韓国語の「～나다 (naida)」にはないので、韓国語を母語とする学習者は、母語では1つであった概念の使い分けが課題となると指摘している。

本稿では、こういったことを踏まえ、韓国語を母語とする学習者が「～出す」の使われる領域と「～始める」の領域をどのように区別しているか、学習者の持っている意識を実際に調べる。そのため、開始の「～出す」と「～始める」の意味の差を整理した後、日本語母語話者と韓国語学習者を対象に調査を行い、両集団の判断がどのようなどころで異なっているかを見る。

2. 「～出す」と「～始める」の意味的差同

開始の「～出す」と「～始める」は類義語であるが、いうまでもなく、その言葉が指す領域が完全に一致しているわけではない。また、「～出す」の場合、いろいろな意味を持ち合わせる多義語でもある。

このような類義語と多義語の考察にあたり、Bolinger (1977) の以下の2つの命題は示唆する所が多いと思われるので、本稿ではこの2点を中心として「～出す」と「～始める」の意味を論ずる。

- A. 「かたちが変われば意味も変わる」
- B. 「かたちが同じであれば意味も一定である」

この観点から「～出す」と「～始める」を考察すれば、まず、Aからわかるように、形が違う以上、2つのV2、「～出す」と「～始める」は、類似した意味を持つものの、異なる意味領域を持つこととなる。

両語の差に関して、寺村 (1984) は、「～始める」が使われる開始には「意志性」があり、「～出す」の開始には「突然性」があると述べる。このような指摘は、複合動詞のV2に関して詳しい分析を行っている姫野 (1999) とも通じるところがある。姫野 (1999:97) は「～始める」と区別される「～出す」の特徴を次のようにまとめる。

- ① 感情の動きを表す語には「～出す」が適切。
怒り出す：? 怒り始める
- ② 不測性を強調する場合は「～出す」が適切。開始意識が強い場合は「～始める」がふさわしい。
- ② 音の自然発生 (電話が鳴り出す)
電話が鳴り出す：? 電話が鳴り始める
- ④ 「今にも～しそうだ」という現実化の直前の様相を表す表現で、自然現象の場合。
今にも雨が降り出しそうだ。：? 雨が降り始めそうだ。
- ⑤ 即興性やエネルギーの爆発など
「(その子は) ラジオから三味線が聞こえれば、踊りだすような子だった」(新聞)
- ⑥ 意志的表現にはそぐわない。
? 早くやりだせ：早くやり始める

寺村 (1984) と姫野 (1999) の研究から、「～出す」は主体がコントロールできない、急な開始のニュアンスを持ち、それが「～始める」と異なるということがわかる。

では、「～始める」と異なる「～出す」のこのような意味はどこから起因するのか。これは、「～出す」が「移動」を表す本動詞から派生したことと関連すると思われる。「始める」の場合、本動詞自体が「開始」の意味で、V2としての用法と本動詞との意味の差がないのに対し、「～出す」の場合、「移動」を表す動詞「出す」がV2としては「開始」の意味を持ち合わせるようになったものである。

複合動詞のV2は、その動詞の単独動詞用法に比べて「意味が抽象化し、接辞化することがよくある」(斉藤 1985:132) といわれる。「～出す」もアスペクト化した「開始」の意味は、実際の具体的な移動が時間的な相として抽象化したものである。空間は我々の目に見える具体的な概念であるのに対して、時間は抽象的概念であることから、空間の概念を借りて時間を表現するのは普遍的に見られる現象であるⁱⁱ⁾。

開始の「～出す」も、「空間」に関する動詞が、複合動詞のV2として使われながら抽象化し、「時間の開始」を表すようになったものである。森田 (1977:273) は、このような「～出す」の派生過程を、「中にある事物を外側へ、表面のほうへと移し現れるようにするという意から、新たな状態を発生させる意へと発展し、そこから

新たに事が始まる意へと転じていく」といい、「移動」が「開始」になる意味の展開過程を分かりやすく説明している。

「～出す」が「移動」から「開始」の意味へどのように拡張したかに関しては、今井（1993）がさらに詳しい分析を提供する。彼は開始の「～出す」が本動詞「出す」から派生する過程を、1つのスキーマからの拡張として統一的に捉える。単独動詞の「出す」には「外部への移動」と何かを外へ出す「外部からの力」が想定されている。今井（1993）は、この「外部からの力」が認知作用の「主観化」によって「参照点化した」ⁱⁱⁱと主張する。ここで参照点とは、事態を眺める話者の視点ともいえるが、このようにして参照点が外部に置かれるため、話者は命題が表現する事態を外から眺める立場になる。それで話者は事態を知覚するだけであり、事態に対する制御力を持っていないという。したがって、「～始める」が単なる事態の開始という意味を持つものに対して、「～出す」は「話者の視点から見て知覚可能な形での事態の生起」という意味を持つようになると述べる。

以上のように、「～出す」は「移動」から「開始」という、一見あまり関係のなさそうな意味を同時に含んでいるが、開始の「～出す」は移動の「出す」と意味的に連続していることが証明できた。これから、Bolinger（1977）のBが示唆すること、即ち同じ形である以上、その根幹には同じ意味の含みがあることも満たされる。また、このように開始の「～出す」を本動詞と関連付けて統一的に捉えることによって、なぜ開始「～出す」には突然性があり（寺村、1984）、姫野（1999）の⑥のように命令・使役などの意志的な表現にはそぐわないのかも説明できる。深谷・田中（1998）は、概念形成の認知過程を「差異化・一般化・典型化」の相互作用によるものと想定しているが、これは今まで論じた2つのV2の意味概念にも適用できると思う。特に、Bolinger（1977）のAは差異化と、Bは一般化とも関連があると考えられる。即ち、言語においてBolinger（1977）の命題、そして、人間認知の作用を考えると、日本語母語話者は「～出す」の様々な意味を1つのカテゴリーとして把握する（一般化）と同時に、開始の「～出す」と「～始める」を自然に使い分けられる（差異化）。

松田（2000）は、日本語学習者の動詞（割る・壊すなど隣接語）習得において、このような「差異化・一般化・典型化」の概念形成を研究した。その結果、学習者はある程度典型的な用法はわかっているが、その語と隣接語との差を完全には習得していない、日本語母語話者とは違う意味の境界を持っていることが明らかになった。

松田（2000）によると、語彙を習得するということは、その語の中心の意味と使われる領域を習得することであり、その言葉の意味と使い方を正確に把握し、類義語とのニュアンスの差を理解できるようになることである。本稿では、このような立場から、韓国語を母語とする学習者を対象に「～出す」と「～始める」の使い分け意識を調査して、日本語母語話者の意識とどのように違うかを比較しながら、学習者が持っている概念を探る。

3. 研究方法

研究方法としては日本語母語話者と韓国人学習者を対象に文判断テストを実施した。以下、調査の対象と方法を述べる。

3.1 調査の対象者

- ①日本語母語話者：36人（20～60代、関東出身）
- ②韓国人日本語学習者：64人（韓国の大学の日本語学科在学）

日本語レベルは中上級、学習年数は2～5年

日本語母語話者（以下母語話者）は成人の日本人男女で、方言の影響を考え、出身は関東に限った。主に東京都と神奈川県出身で、職業は主婦から会社員まで多様である。

韓国人学習者（以下学習者）は日本語専攻の3年生以上の64人で、主にソウル所在の大学2校の3・4年生向けの授業の受講生であった。学習歴は日本語を習ってから2～5年で、レベルは中上級から上級くらいであった。そのうち、日本語能力試験1級を持っている被験者は27名（全体の42%）、2級を持っている人は17名（全体の27%）であった。参考として本調査を行う前、SPOT^{iv}のD・E型を実施した結果、60個の問題の正解数は最小値40から最大値59で、平均は51.52であった。

このように中級以上の学習者を想定したのは、ある程度の日本語能力がないと、様々な文を十分理解できない

と予想されたからである。

3.2 調査方法・内容

調査は、母語話者・学習者ともに14項目の「～出す・～始める」選択テストを実施した。母語話者には配布して1週間後に回収したが、学習者はSPOTと一緒に実施しなければならなかったため、授業の時間の一部を利用して答えてもらった。

実験の対象となった文は、筆者が作成したものもあるが、関連論文で用例として扱われたものを拾い出したもの、新潮文庫100冊のCD-ROMおよびインターネット朝日新聞を検索、参考にしたものもある。これらの文に関しては日本語関連専攻の2人の母語話者にチェックしてもらった。

テスト内容は「～出す」と「～始める」の2つの中で、もっともふさわしくて自然なものを選ぶように求めた。問題は「彼女はその言葉を聞いて、大きな声で笑い（出した、始めた）」のように提示し、自分が自然と感じる言葉に○をつけるように求めた。ただし、両方共に自然だと感じる場合は2つ共に○をつけるように指示した。問題14項目は「～出す」が予想される文が7文、「～始める」が予想される文が7文で、半分ずつになるようにした。指示文は次のようである。

次の文は何か動作の開始を表しています。そのとき「～出す」を使うのが自然か、「～始める」を使うのが自然か、ニュアンスを考えながら○を付けてください。両方つけてもかまいません。

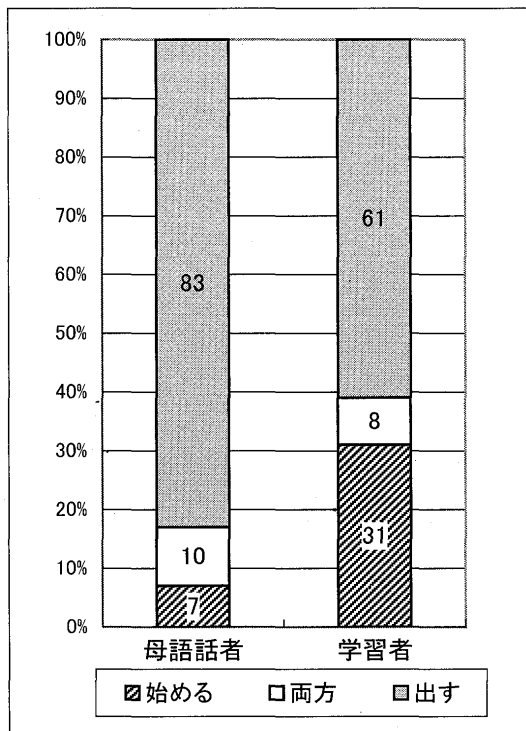
また、最後に自分がその判断をしながら考えた「～出す」と「～始める」の差を自由記述してもらった。

4. 結果と分析

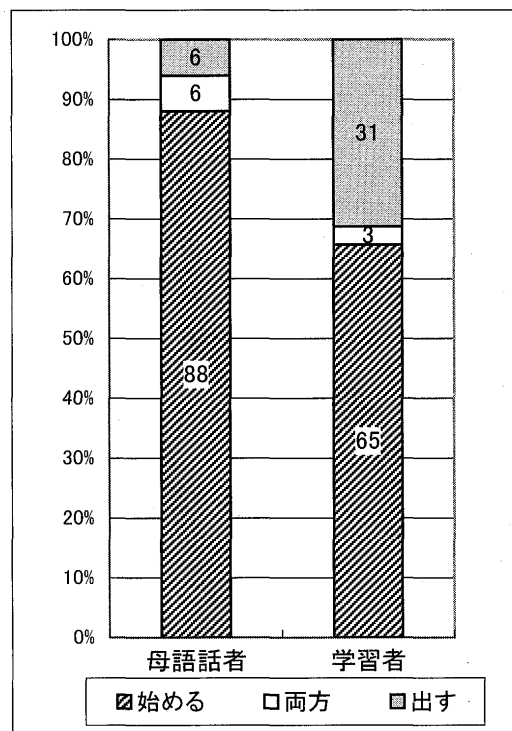
結果に関してはまず、結果全体の傾向と様子を見た後、「～出す」項目と「～始める」項目に分けて、例文別の傾向と母語話者・学習者両グループの統計的な差を確認し、分析する。

4.1 全体の傾向

母語話者と学習者の2つの被験者グループがどのような傾向を見せるかを「～出す」が予想された7の例文と「～始める」が予想された7の例文に分けて、その選択の割合の平均値を出すと<図1>と<図2>のようになる。



<図1 「～出す」予想7文の選択率平均>



<図2 「～始める」予想7文のの選択率平均>

〈図1〉は「～出す」が予想された7文でどのような判断をしているか、母語話者と学習者それぞれで平均値を出したものである。7文において母語話者は平均83%の高い割合で「～出す」を選択している反面、「～始める」を選んだ割合は平均7%にすぎない。学習者も「～出す」予想の7例文について「～出す」を選択した割合が平均61%で、「～出す」のほうが優勢であったものの、母語話者のような圧倒的な差は見られない。

〈図2〉の「～始める」予想7文の平均も、母語話者は88%が「～始める」を、6%が「～出す」を選択して、比較的に選択が統一されているが、学習者の場合、「～始める」の選択が7文平均65%、「～出す」が31%で、判断にゆれがあることが窺える。

どちらを見ても母語話者は「～出す」か「～始める」かに関して比較的にはっきりした区別ができ、その区別も被験者間で共通している傾向を見せるが、学習者の場合、判断に正確さが欠けており、両語の意味の区別が母語話者ほどはっきりしていないことがわかる。

しかし、学習者があらゆる文において判断にゆれがあったのではない。母語話者に比べて学習者の判断は項目による割合の変化が目立った。母語話者の選択率に比較的に接近している文と、母語話者と反対の傾向を見せる文があったのである。次の節では、どのような例文で学習者が母語話者の判断に近づき、どのような文で差が出たか、例文別に統計的な処理をした後、分析する。ここで「両方」にチェックした答えはどの項目においても少数であり、どちらかへの傾向を見るには無効回答であるため対象外とし、「出す」と「始める」のどちらかを選んだ答えについて統計処理と分析を行う。

4.2 母語話者が主に「～出す」と判断した文

〈表1〉は、「～出す」を選択すると予想された7文について、母語話者と学習者の答えを整理したものである。それぞれ例文の答えを「～出す」と「～始める」に分けて数え、百分率を出した。また、例文別に χ^2 検定を行なって、両グループの間に、有意な差があるかも見た。

〈表1 「～出す」予想7項目の答え〉

(**p < .01)

ID	JA (N=36)		KO (N=64)		χ^2
	出す	始める	出す	始める	
1 彼女はその言葉を聞いて、大きな声で笑い(出した、始めた)	28 (78)	1 (3)	44 (69)	11 (12)	4.24
2 赤ちゃんがいきなり大声で泣き(出した、始めた)。	34 (94)	0 (0)	48 (70)	8 (13)	5.33
3 電話が鳴り(出した、始めた)。	34 (94)	0 (0)	41 (64)	19 (30)	13.49**
4 今にも雪が降り(出し、始め)そうだ。	36 (100)	0 (0)	49 (77)	14 (22)	8.7**
5 テレビドラマは一度見(出す、始める)と、続けて見たくなる。	16 (44)	13 (36)	14 (22)	48 (70)	9.5**
6 頭が痛くなり(出した、始めた)	26 (72)	4 (11)	23 (36)	39 (61)	19.96**
7 その子は今にも泣き(出し、始め)そうな顔で言った。	36 (100)	0 (0)	58 (91)	3 (5)	1.83
平均	30 (83)	2.6 (7)	40 (61)	20 (31)	

※ () は%

7つの例文の結果を見ると、母語話者はほとんどの例文において「～出す」の選択率が72～100%^{vi}を示している。これに対し、学習者の場合「～出す」の割合は例文別に22～91%で、その幅が広い。また、(5)、(6)の2つの

例文については母語話者の判断とは逆に「～始める」のほうが優勢となっている。

7文のうち、両グループの間、有意水準1% (df=1) で有意な差が見られた例文は4つあり、見られなかった例文は3つであった。次に有意な差が見られなかった例文(学習者の判断が母語話者とあまり差がない例文)と、有意な差が見られた例文(学習者の判断が母語話者と違う例文)に分けて詳しい分析を試みる。

[i] 有意な差が見られなかった例文

学習者と母語話者の間に、有意な差が見られなかった文、即ち、学習者の判断が母語話者のそれに近い例文は次の3つであった。

- (1) 彼女はその言葉を聞いて大きな声で笑い出した。(学習者の69%が「～出す」)
- (2) 赤ちゃんがいきなり大声で泣き出した。(学習者の70%が「～出す」)
- (7) その子は今にも泣き出しそうな顔で言った。(学習者の91%が「出す」)

この3文は全部、感情の動き・音の発生・エネルギーの爆発などの要素を含んでいて、前述した姫野(1999)が挙げた「～出す」の特徴にほとんどあてはまる。このような場合「～始める」を使うと、わざと演じるような感じがして不自然な文になる。特に(7)の「泣き出しそう」の場合、姫野の④の条件まで含んでいることが、高い選択率と関連があると思われる。このような例文は話者がコントロールできない急な感情の表出を表していて、意図性も予測性もない典型的な開始「～出す」文であるといえる。

また、これら「～出す」に含まれた「開始」の意味は、中にあった感情があるきっかけによって爆発的に噴出するという意味になる。イメージ的に笑い声、または涙が急に出る感じで、「開始」の意味といっても、比較的に「～出す」の原意を含んでいる表現であることがわかる。学習者の「～出す」の選択率が高かったのは、こういった「開始」と「噴出」のつながりが自然であったからだと思われる。このような場合、学習者は「～出す」を選択し、母語話者の判断と有意な差は出なかった。

[ii] 有意な差が見られた例文

有意な差が見られた4例文は、また2つに分類できる。(3)と(4)は学習者の答えの大体の傾向は「～出す」のほうに偏っているが、母語話者に比べ「～始める」の割合が高かったので、2つのグループが有意な差を見せたことがわかる。これに対して、(5)と(6)は母語話者と学習者が逆の傾向を見せ、学習者の答えは「～始める」のほうが優勢の結果を示していた。

- (3) 電話が鳴り出した。(学習者の64%が「～出す」)
- (4) 今にも雪が降り出しそうだ。(学習者の77%が「～出す」)

(3)と(4)の場合、学習者の「～出す」選択率は上の有意差無し例文に比べてそれほど低くなかった。(4)の場合、学習者も77%の高い選択率を示しているにもかかわらず、母語話者の意見がきれいに「～出す」に統一されたのが有意差の原因だということがわかる。しかし、同じく「～出しそう」例文であるにもかかわらず、(7)の「泣き出しそう」より、「降り出しそう」の「～出す」選択が少なかったのは、「泣く」に比べ「降る」のほうが噴出の意味が弱いことが選択に影響を及ぼした可能性も考えられる。

前述した有意差の見られなかった3つの例文も、この2つの例文も、開始の動作の要因が話者ではなく他者にある。即ち、話者の意志とは関係なく、「話者のほうに迫ってくる動作が始まる」という意味を持つ。このような場合、学習者は母語話者よりは割合が低いものの、「～始める」より「～出す」のほうを選択していた。

しかし、(5)と(6)になると、母語話者は「～出す」の割合が高いのに対して、学習者はむしろ「～始める」を選択する割合が高い。学習者と母語話者が逆の選択をする傾向を見せている例文である。

- (5) テレビドラマは一度見出すと、続けて見たくなる。(学習者の14%が「～出す」)
- (6) 頭が痛くなり出した。(学習者の23%が「～出す」)

(5)は姫野(1999)の「～出す」がふさわしい状況にあった例文^{vii}を直して用いたものである。姫野は意図的ではない、無意識の行動で、開始の意識がない場合は「～出す」がよいといっている。母語話者の場合、前後の文脈を省いたせいも、割合がそこまで高くないとはいえ、「～出す」が少し優勢な結果が出た。しかし、学習者の場合、「～始める」の選択率が「～出す」よりはるかに高かった(70%)。これは、話者自分の動力による動作であるため、学習者としては「～出す」より「～始める」のほうを選択したのだと思われる。

- (6)の場合、母語話者は「～出す」が72%で目立った優勢を示したが、学習者は逆に61%が「～始める」を

選んでいる。(5)と同じく、この例文は話者自身に関する動作であり、他者ではない自分の身体の中に動因がある。しかし、その要因は話者がコントロールできるものではなく、自分の意図とは関係ないので「～出す」が自然な例文に入る。

この2つの文は、前述した姫野の条件のうち⑥(意志性がない)以外には満たしていないので非典型的な例とも言える。学習者は動因が第三者にある行動の開始は「～出す」の領域だという意識を持っているが、このようにその動因が話者の中にあるが、必ずしも自分の強い意志とは関係しない例文においては母語話者と反対の判断を下している。ある程度の知識は持っているが、境界にある項目に関しては母語話者とは違う意味領域の設定をしていると思われる。

4.3 母語話者が主に「～始める」と判断した例文

<表2>は、「～始める」を予想していた7例文について、母語話者と学習者の答えを整理したものである。それぞれ例文の答えを「～出す」と「～始める」に分けて数え、百分率を出し、 χ^2 検定で両グループ間の有意差の有無を見た。

<表2「～始める」予想7例文の答え>

(**p < .01)

ID	日本語母語話者 (N=36)				韓国人学習者 (N=64)				χ^2
	出す		始める		出す		始める		
1	0	(0)	34	(94)	41	(64)	20	(31)	40.2**
2	0	(0)	36	(100)	4	(6)	58	(91)	2.42
3	2	(6)	33	(91)	6	(9)	56	(88)	0.46
4	2	(6)	33	(91)	17	(27)	43	(67)	7.07**
5	1	(3)	35	(97)	5	(8)	59	(92)	1.04
6	4	(11)	26	(72)	27	(42)	34	(53)	8.56**
7	6	(17)	25	(69)	37	(58)	23	(36)	14.67**
平均	2	(6)	32	(88)	20	(31)	41.9	(65)	

※ () は%

7つの例文の結果を見ると、有意水準1% (df=1) で有意差が見られた例文は3つ、見られなかった例文は4つであった。これについても有意差の有無で分けて分析してみる。

[i] 有意な差が見られなかった例文

母語話者と学習者の間、有意な差が見られず、学習者の判断が母語話者に近づいていたのは次の3つであった。

(2) 彼は遅くなるというから、先に食べ始めましょう。(学習者の91%が「～始める」)

(3) そろそろこの本を読み始めようか。(学習者の88%が「～始める」)

(5) 来月から日本語を習い始める予定です。(学習者の92%が「～始める」)

この3つの例文はどれを見てもその動作について話者が今から、自分の意図で開始するという意味で、意志性

が極めて高い。このような例文について学習者は高い比率で「～出す」ではない「～始める」を選択し、話者が意志を持って開始する動作は「～出す」の領域に属しないという意識を持っていることを示した。

〔ii〕有意な差が見られた例文

「～始める」予想例文で有意差が見られた例文は4つであるが、これも「～出す」予想例文と同様に学習者の選択率によって2つに分けることができる。

(4) チャイムが鳴ってから、書き始めてください。(学習者の67%が「～始める」)

(6) 先生が生徒に本を読み始めさせた。(学習者の53%が「～始める」)

(4)と(6)は学習者の傾向は「～始める」のほうが優勢であったものの、母語話者よりその数値が低い。また、上の有意差が見られなかった例文に比べても、相対的に「～出す」を選択した比率が高い。

この2つの例文はそれぞれ「命令」・「使役」であるが、2つ共にある行動を相手がするように仕掛ける例文である。その結果、その行動を話者または主語ではない第三者がするようになる。この2つの例文に関して「～始める」ではなく「～出す」を選んだ学習者は、開始の主体が話者自分ではないものは「～出す」の意味領域に属すると判断したと思われる。第三者の行動で、その行動が話者に迫ってくるようなことは、予測性のある動作であっても、学習者が「～出す」を選ぶ可能性が高いということである。

(1) 梅雨の雨は5月に降り始め、7月まで続きます。(学習者の31%が「～始める」)

(7) あと一時間で夜が明け始める。(学習者の36%が「～始める」)

(1)と(7)は、母語話者と学習者が反対の傾向を示した。母語話者は予想通り、「～始める」を選択した人が多かったが、学習者は「～出す」のほうが多かった。母語話者の場合、話者の意志ではなくても「予測性」のある自然的な自然現象については「～始める」を使う。だが、学習者は話者に向かってくる、話者の意志とは関係ない出来事については「～出す」がふさわしいと感じ、自分からではない行動については「～出す」の領域に入れる傾向があると思われる。

5. まとめと結論

「開始」を表すV2「～出す」は、「～始める」と類似した意味を持っているが、もともと「移動」から派生した意味用法であるので、両語にはニュアンスの差が存在する。このような差を学習者も習得しているか、学習者の意味領域は母語話者とどのようところで差があるかを見るのが、この研究の目的であった。その結果、学習者は母語にはない概念にもかかわらず、ある程度は開始の「～出す」の概念を理解しているように見えた。テストの後、被験者に自由記述してもらった「～出す」と「～始める」の差に関する考えをみると、多くの学習者が「急なことの発生には『～出す』がふさわしい」「自分の意志で自分が行う行動には『～出す』より『～始める』のほうがふさわしい」と答えていた。意志性のあることには「～始める」を、コントロールのできない突然の開始には「～出す」を使う傾向を見せていたのである。

しかし、自分の行動の開始＝「～始める」、第三者による動作の開始＝「～出す」のように単純化する傾向も見られた。それで話者の中で起きる動作であるが、自分の意志とは関係ない例文にも「～始める」を、また予測可能な日常の自然現象には「～出す」を使って、母語話者と異なる選択をした。「意志性」も「予測性」もない典型的な「～出す」例文に関しては「～出す」を使う意識は持っていたものの、「意志性」はないが予測は可能な日常の自然現象などに「～出す」を使ったり、「意志性」と「予測性」は薄い、話者の内部に動因があるものに関しては「～始める」を使うなど、典型的な例ではない文の場合、母語話者とは逆の傾向を見せたのである。

国立国語研究所の『複合動詞資料集』(1987)によると、複合動詞構成要素2166語の中で後項の「～出す」は伸べ432語で「～得る」とともに1位で、「～始める」はその次の3位である。両語共に日本語で多く使われ、学習者の接した可能性の高い基本的複合動詞ということがわかる。しかし、約半数の被験者が能力試験1級を持ち、学習経歴も2～5年くらいの上級学習者にもかかわらず、母語話者とはいろいろな例文において異なった傾向を見せた。

これは母語話者の場合、長い間その言語に接する中で自然に語彙の意味領域を内在化ようになるが、学習者にはこのような意味の内在化が自然に行われにくいからだと思われる。学習者はある程度意味の使い分けがで

きても、非典型的な例までは習得されにくく、母語話者の意味領域と違う基準を持っている可能性が窺えた。

文法・音声などの領域に比べ、語彙の習得は体系性および規則性が欠けているといわれてきた。しかし、今回の実験結果を見ると学習者の意味領域は、典型性が高いものを中心に発展していつている可能性がある。今後学習者の語彙の意味習得過程をより明確にするためには、語彙の意味と構造に関する分析および、学習者が持っている意味領域と語彙構造の関係に関する更なる研究が求められると思われる。

注

- i 「複合動詞」の範囲と分類方法は、論者によって異なるが、本稿では、姫野（1999）、松田（2004）などに従って、「前項動詞の連用形+後項動詞」で構成された動詞を全部「複合動詞」として見なす。
- ii 空間から時間への一方方向性に関する詳しい記述は初山（1995）を参照。
- iii 主観化とは「本来客観的な事態を表す言語形式が話者の視点や発話視点などの主観的な要因を含む意味へと拡張される意味変化」という。詳しい説明は今井（1993:13）を参照。
- iv Simple Performance-Oriented Test. 筑波大学留学生センターにより開発された日本語能力のテスト。一文字の穴埋め形式のテストで、被験者は自然発話の速度で録音されたテープを聴きながら、空いた箇所を埋める。AからEまで5つのバージョンがあり、本研究で用いられたD・Eはもっとも難易度が高い。
- v このように収集した用例のほとんどは学習者にわかりやすいように語彙や文の長さを調節して、もとの形を保っているものはあまりないので、詳しい原典については割愛する。
- vi 9番のみ44%で低い。
- vii 姫野（1999）の元の文は次のようである。
「何年も映画を見なくて、別に見たいとも思わなかったが、先週久しぶりに見てから、また行きたくなかった。一度見出すと、続けて見なくなる」

< 参考文献 >

- 李 暉洙 1996 「日韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다」の対照研究—本動詞との関連を中心に—」『日本語教育』89 pp.76-78.
- 今井 忍 1993 「複合動詞後項の多義性に対する認知的意味論によるアプローチ—「～出す」の起動の意味を中心にして」『言語学研究』12 pp.1-24 京都大学言語学研究会
- 呉 鐘烈 2000 「局面動詞について：「～始める」と「～出す」形の副詞的修飾成分との共起関係を中心に」『日本語と日本文学』31 筑波大学国語国文学会 pp.1-13.
- 桑原文代 1998 「変化の開始を表す「～はじめる」」『日本語教育』99 pp.1-11.
- 斎藤倫明 1985 「複合動詞後項の接詞化—「返す」の場合を対象にして」『国語学』140 pp.120-132.
- 田中茂範 1987 『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』三友社出版.
- 田中茂範 1990 『認知意味論—英語動詞の多義の構造』三友社出版.
- 田中茂範 2004 「基本語の意味のとらえ方—基本動詞におけるコア理論の有効性—」『日本語教育』121 pp.3-13.
- 姫野昌子 1999 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 松田文字 2000 「日本語学習者による語彙習得」『世界の日本語教育』10 pp.73-89.
- 松田文字 2004 『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房.
- 初山洋介 1995 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味転用の一方方向性：空間から時間へ—」『東京大学言語学論集』14 pp.621-639.
- 森田良行 1977 『基礎日本語 意味と使い方』角川書店.

(2006年1月10日受理)